

女子大國文

第百六十三号

平成三十年九月発行

女子大國文

第百六十三号

平成三十年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十三号

平成三十年九月十五日 印刷
平成三十年九月三十日 発行

〒六〇八八〇 京都市東山区今熊野北日吉町壹番地

編輯兼 京都女子大学国文学会
発行者

電話 〇五―五三―一九〇七六

FAX 〇五―五三―一九二一〇

振替 〇〇八―一五―一三二四

〒六〇八八〇 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五―四一―四一〇八代

FAX 〇五―四一―四二八二

二〇一八年度公開講座

三巻本『枕草子』不審本文考……………後藤康文(一)

——「風は」の段「夏とほしたる綿衣」を中心に——

或作家への報告……………坂本信道(二六)

——王命婦と光源氏——

源氏物語における玉鬘の造型について……………今井友子(三八)

——『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈験譚の関わり——

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジツドの

講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容……………宮崎三世(六二)

『古今和歌六帖』の「萬葉歌人」一覽……………池原陽齊(七九)

近衛信尹・前久詠「法楽一夜百首」攷……………大谷俊太(一一)

彙報……………(一四〇)

京都女子大学国文学会

彙報

○女子大國文第一六三号をお届けします。

○前号でご報告した濱川勝彦先生のご逝去を悼む追悼文を掲載いたしました。

○優秀論文発表者の卒論要旨・体験記、修論要旨・体験記、さらに優秀論文発表会、新人生歓迎行事、公開講座の感想文を掲載しました。

研究室だより

○長年にわたり本学国文学科に勤務され、ご尽力をいただいた江富範子先生が、本年三月を以てご退職になりました。先生のみすますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。江富先生より、御退職のお言葉をいただきました。

○四月より、新任として、小山順子先生をお迎えいたしました。主に、『新古今和歌集』の時代の和歌表現をご専門とされる先生です。本号に御就任の御挨拶をいただきました。

○昨年度一年間、大阪大学大学院文学研究科において国内研修をしていた山崎ゆみが、この四月より戻りました。

○本年度の文学部国文学科主任兼国文学会代表幹事は中前正志先生で、池原陽斉・川島朋子両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたっておられます。

○昨年度本学科に就任された池原陽斉先生が、第十三回全国国語国文学会賞を受賞されました。この賞は、「国語国文学を中心とする、若手研究者の優れた研究業績に対して贈られ」（全国大学国語国文学会公式ホームページより）るものです。今回、先生の御著書『萬葉集訓読の資料と方法』（笠間書院、二〇一六年十二月）がその榮譽を博しました。国文学科にとっても大変喜ばしい知らせとなりました。池原先生にお祝い申し上げますとともに、益々のご活躍をお祈りいたします。なお、授賞式と受賞記念スピーチは、去る平成三十年六月三日（日）に、二松学舎大学にて行われましたことを附記いたします。

二〇一八年度国文学会行事（前期）

○新人生オリエンテーション

四月五日（木）午後一時半より 於J224教室

○優秀論文発表会

五月十二日（土）午後一時より 於J420教室

〈卒業論文〉

・双子の栄華

― 『木幡の時雨』の構想と趣向― 松村 美咲氏

・芥川龍之介「袈裟と盛遠」論

― 眼の役割と「憐む可き女主人公」について―

森 由佳氏

・『和漢朗詠集』四一五番「霞晴れ」歌における「いとゆふ」考

― 「遊糸」との関係を中心に― 小林 真歩氏

・現代方言「ご無礼しました」用法の細分による共通語との区別

矢野 祥子氏

〈修士論文〉

・慶滋保胤「為二品長公主冊九日願文」論

― 平安朝中期追善願文の中における位置づけ―

小西 洋子氏

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

五月二十六日（土）午後一時より 於音楽棟2階演奏ホール

着付・囃子に関する解説拝聴、小鼓・大鼓体験、狂言『寝音

曲』能『橋弁慶』鑑賞

○公開講座（大学と共催）

六月七日（木）午後一時より 於J420教室

講題 軍記史の終章

講師 京都女子大学元教授

笹川 祥生先生

講題 三巻本『枕草子』不審本文考

― 「風は」の段「夏とほしたる綿衣」を中心に―

講師 北海道大学大学院教授

後藤 康文先生

後藤先生より、御講演内容を本号に御寄稿賜りました。笹川先

生の御講演内容を次号に御寄稿賜る予定です。笹川先生の公開講

座の感想文も、次号掲載予定です。

江富先生退職の辞

十二月二十日

江 富 範 子

去年の十二月二十日、帰宅すると、郵便受けにメモが入っていた。「近くまで来たので、もしやお会いできるかと立ち寄ってみました。御留守で残念でした」との古い卒業生からのものがあった。——貴女は卒論締切日を忘れたのか。十二月二十日は忘れようとしても忘れられない、一年で一番、重要で、かつ長い日である。

三十年前、赴任したての頃は、放っておいても学生は卒論を締切日までに提出していた。先述の卒業生が二十日に私が在宅していると考えたのも無理もない。が、いつの頃からか、十二月二十日となると、国文学科教員全員が学内に待機するようになった。

朝はまだ静かだ。昼を過ぎると、学生研でコピーしたり綴じたりするそれまでの音に加えて、電話の音（近年は、携帯やスマホに取って代わられつつある）や話し声——どこかのゼミの学生が提出を断念したとか、懸念される学生と連絡がつかないとか、何らかのトラブルが発生し、泣きつく者とか——、教員や学生が慌ただしく研究室を出入りするドアの音など、やや、騒がしくなる。

もちろん、ゼミ生全員がすでに卒論を提出し、意気揚々としている教員もいる。五時が近づくと、学生に提出を促す教員の声、鳴り響く電話の音、「あとまだ何人提出されていません」という教務課からの連絡もある。急を告げるのは五分前。学生達が一齐に駆け出す。書きかけの卒論数枚を手に掴んだ当の学生、残りの原稿やコピーを持つ者、その二人の荷物を抱える者、三人一組となって、何組かが教務課へと駆けて行く。今年は何人、卒論が提出できなかったかが判明するのは五時過ぎ。事後の策を検討しよう。えで、六時頃、帰路に着く。

右は例年のことであるが、毎年、不測の事態も出現する。大雪や自動車事故、交通渋滞など言わずもがな。自殺を考える者（幸い、未遂に終わった）、急病で救急車で運ばれる者、居眠りをしてしまった者（「ウサギとカメ」の昔話を思い出してほしい）、卒論を紛失する者など、枚挙にいとまない。軽微な例を挙げよう。一昨年の当日五時前、これでは間に合わないと、突然、靴を脱ぎ捨て、教務課へと駆け出した学生がいた。冬至前とて、あたりは暗く、折しも雨で道はぬかるんでいる。おまけに教務課への道は、アップダウンがきつい。が、彼女は間に合った。おそらく、靴を脱いだ彼女の判断は正しかっただろう。一分遅れても、卒論は受理されないからである。

去年の卒論説明会で、四回生アドバイザーだった私は一昨年の例を挙げ、胸に手を当ててみて、自分にも該当しそうな学生は、走りやすいよう、スニーカーなどを履いて来るようにと、忠告した。が、やはり、一名、靴を脱いで走った学生がいた。ヒールの高い靴を履いて来た当の学生に「私の忠告を聞いていなかったのか」と尋ねたら、「自分のこととは思いませんでした」との返答であった。

以上、ほぼ三十年、私はこれを繰り返して来た。もちろん、卒論に関わって、そこに喜びがなかったわけではない。卒業論文作成を通して、学生は大きく成長する。それに付き合い、学生と共に感じ合うことができたのは、決して人付き合いの良い方ではない私にとつて、教職、それも京女で教職についたが故の僥倖だったと言えるかもしれない。教師としてはまことに幸せな三十年であった。

しかし、ここ数年來の体調不良に加え、還暦を過ぎて、心身ともに疲れた私は、定年にはまだ少し早い、思い切つて、退職することに決めた。池原陽齊先生という良き後任を得、我ながら良い決断であつたと思う。

願わくは、今年の十二月二十日、炬燵の天板の上には饅頭と番茶、膝の愛猫（目下、募集中）を撫でながら、はて今日は何の日

だったか、首をかしげてまどろんでいた。それとも、忘れられないでいるだろうか。

小山先生就任の辞

着任のご挨拶

小山 順子

今年度より、中古和歌の担当として着任いたしました小山順子です。こちらに赴任する前は、東京都立川市にある人間文化研究機構国文学研究資料館で五年間勤務していました。資料館という性質上、前任先は、教育機関としては大学院の博士後期課程のみが置かれていました。担当する大学院生は一年に一人二人。一学年百二十名定員の本学国文学科とはまったく違う環境でした。しかも私には、女子大学での授業は、非常勤講師を含めてまったく経験がありません。自分自身、大学院に至るまでずっと共学で過ごしてきましたから、女子大学という環境がとても新鮮です。

宇治市で生まれ育ち、小学校は宇治市内、中学校から大学院までは京都市内の学校に通っていました。小学校校区内に平等院や宇治神社・宇治上神社があり、中学校からは毎日宇治橋を渡って

通学するという場所で育ったことは、今、古典文学を専門に研究する上での土壌となつていると感じています。

専門にしているのは、和歌文学です。主に、『新古今和歌集』の時代の和歌表現について研究しています。『新古今和歌集』といえは、その代表的な技法に「本歌取り」がある、ということは高校の文学史でも学習します。「本歌取り」は、古い和歌の一部を使って新しい和歌を作る方法、というのがおおまかな説明ですが、このように、先行作の表現を自分の作品に取り込んで使う「引用」の方法は、洋の東西、時代の旧新を問わず、普遍的にあるものです。古い作品への敬意、それを引用する知性、作者と読者の共有知、そして生みだされた新たな表現を持つダイナミズム。文学の歴史の上で繰り返し返されてきた「引用」という営為が、どのような「創造」へと結びついているかを考えるのが、私が取り組んでいるテーマです。

特に昨今では、サブカルチャーでもベダントリーが好まれる風潮にあるからか、「引用」がレトリックとして多用されているように感じています。作者は必ずしもレトリックの技法として明確に意識して用いているわけではないでしょう。しかし、「引用」が多用されている現代の作品に触れるにつけ、「本歌取り」という名称を与えられ、古典の世界に限定された修辞技法のように思

われがちな方法を持つ、普遍的な力を感じます。

もう一つ感じるのは、「引用」が多用される現象は、その分野が一つの飽和点を迎えていることと表裏一体である、ということだと思います。新古今時代が、まさにそうでした。和歌表現の伝統が確立し、珍しさを求めることにも限界を迎えていた時代にあつて、藤原俊成・定家父子が打ち出した方向が、古典回帰でした。古典的な枠組みの中で、新しさをどのように作り出していくかが、この時代の課題となりました。しかし面白いのが、古典と伝統を重視したこの時代が、同時に中世和歌の扉を完全に開いた時期でもあつたということです。私は卒業論文では『千載和歌集』に取り組んだのですが、卒業論文を執筆している最中に、参考として開いた『新古今和歌集』の華やかさや迫力に心惹かれました。『新古今和歌集』と、それまでの和歌の違いは何なのか。大学時代に「私は『新古今和歌集』が好きだ」とはつきりと感じた、その理由を明確にするために、私は『新古今和歌集』の和歌表現を研究しているのかもしれない。

学生の皆さんと、和歌の面白さや楽しさを共有できるような、そんな授業を目指しています。大学時代は、後で考えると、無為な時間も過ごしつつ、充実したかけがえのない時間であつたと思います。大学時代にしかできないことを、たくさん経験してほし

いのですが、その一つが、興味のあることをとことんまで調べ、考えることです。大学を卒業し、就職して働いたり、結婚して子育てをするとなると、じっくりと一つの物事に向き合って考えを深めることは、本当に難しくなります。まだ着任して日が浅いですが、京都女子大学の学生の皆さんは、好奇心を持ち、自分で調べ、考えることができる人が多いと感じています。そういった良い面を思う存分伸ばしてほしいですし、私自身も、学生の皆さんのパワーに負けられないようにしたいと思います。

濱川先生追悼文

濱川先生を偲んで

二〇〇二年 修士課程修了 細川 さやか
濱川先生ご逝去にあたりまして、慎んでお悔やみ申し上げます。

私が濱川先生に初めてお会いいたしましたのは、修士課程二回生の時でした。現代文学を専攻しておりましたことから、先生の川端康成の講義に興味を抱き、受講いたしました。とても優秀と
は言い難かった私は、初めてお会い申し上げるご高名な先生に、

不安しかございませんでした。

しかしそのような不安を、先生は初回から取り払ってくださいました。柔和な表情で迎え入れてくださり、明朗な口調で話し掛けてくださいました。

講義の教材は川端康成の『掌の小説』で、その中から一人五編を選び考察するというものでございました。大学院生数人で受講する講義だったこともあり、先生のお人柄に引つ張られるように和やかな講義でございました。

あるとき、発表が回ってきた学生が作ったレジюмеに、その学生が選んだ作品に対しての考察がまとめられておりました。急いで作ったものと思われたそのレジюмеには、彼女らしくない誤字がありました。「完璧」と書くべきところを「完壁」と書いてあったのです。それをご覧になられた先生は「うん。でも君は完璧じゃないね」と口元に笑みを浮かべながら、しかしはつきりしたご口調で指摘なさいました。そのご姿勢に、ストレートに伝えるよりも心に残る言い方があるのだと教えていただきました。

また、先生は作品と関連づけて女性についても一言お持ちでございました。

「口紅を筆でひくでしょう。え、君たち、もしかしてそのまま塗るの？リップクリームみたいに？女性の嗜みとして紅は筆でひき

なさい」

とたしなめられたことがございます。今でもお化粧をする際に、時折この時のことを思い出すことがあります。そして心の中で「先生、口紅を筆でひいております。もつともお化粧品屋さんでプレゼントされた試供品ですが」と話し掛け、あの時の先生の「嘆かわしい」と言いたげな表情を思い出します。

先生はこうもおっしゃってりました。

「女性は結婚して子どもを産むと、考え方や作品の解釈がガラリと変わるんですよ。君たちもその時が来ればわかるでしょう」

と。結婚・出産を経験された先輩は大きく頷いておられました。が、当然当時の私には全く理解できませんでした。けれど家庭を持った今、昔読んだ本を再読いたしますと「あれ、こんな話だったかな」などと思えます。登場人物の印象が変わり、言葉の解釈も昔と変わりました。登場人物に我が子を重ねて思わず涙ぐむこともあります。先生がおっしゃっておられたのはこういうことだったのかな、と考えながら読みますと、不惑を迎えた今でも、図々しくも学生時代に戻った気がいたします。

濱川先生のご講義は一年間のみでございましたが、先生のお言葉は深く心に残るものでございました。あらためまして深謝申し上げます。

濱川先生の思い出

峯 村 至津子

「京女のアランドロン」と呼ばれていらした、「三回生ゼミ生二十九名が一人も欠けることなく全員四回生ゼミに残った」——何年前の本学の公開講座に濱川先生をお招きした際、先生をご紹介するにあたって工藤哲夫先生が述べられた、京女ご在職中のエピソードである。確かにその公開講座の折にも、先生を慕う卒業生の方々がほんとうに沢山いらして、ご講演の後も先生を囲んで楽しそうに談笑しておられ、その時の皆様のきらきらと輝いていたお顔を思い出すと、まことに濱川先生の学生からの人気の程と、本学の歴史に残されたものの大きさが偲ばれる。今回この文章を私が執筆させていただくにあたって工藤先生に問い合わせたところ、上記に加え、もう一つ逸話を教えていただいた。それは、濱川先生がゼミ生を招いて親睦の集いをなさるために、ご自宅の食堂を二、三十人も座れるぐらいの広さに改造なされた、というものである。「先生の学生への愛が海よりも深く山よりも高い証左」と、工藤先生からのメールには書き添えられていた。私自身もその昔、京大での学生時代に、非常勤講師としてご出講くださっていた先生から、京女時代のエピソードを伺ったこと

があった。先生ご在職当時、京女の国文学科では、代々先輩から後輩へ伝えられる、冊子にまとめられた「卒論口頭試問に於ける各教員の攻略法」なるものがあったのだそうである。ある時、何かの折にそれをたまたま入手された先生がご自分の所をご覧になると、「涙と指輪」と書かれていたのだとか。「涙」の方はともかく、「指輪」というのが何のことなのか私にはわからず不審に思っていると、当時の京女には卒業する前から結婚が決まっていた、婚約指輪をはめている学生さんたちもおられたのだと教えていただいた。「口頭試問となると、どうしても細かいところまで追及してしまうんですが、まあ確かに涙には弱いですね。それに指輪をはめているのを見ると、この子の将来に傷がついてはいけないという気持ちになる。しかし、ああいうことが書かれているのを見て、ショックでした」と笑いながら仰っていた先生のご様子思い出すと、ほんとうに京女での教員生活を学生さん方と楽しく過ごされたのだな、と実感する。京女に勤めておられた頃の思い出として先生がお話くださった中で、私の記憶に特に鮮烈な印象を残しているものとしては、次のようなご発言がある。

「お酒の席で羊羹を着にして飲んでいると皆が嫌がるんですよ。」

「私はお茶漬けならぬ紅茶漬けというのが好きでね、お砂糖をたっぷり入れた紅茶をご飯にかけて食べるのが好きなんです、

それを皆がまた嫌がるんです。」あまりの衝撃的な内容に私が返答に詰まって困惑していると、その反応を楽しむかのように、笑っていらつしやった先生。そのお話をしてくださった時にも、授業の後、ケーキ屋にご一緒しており、先生が次々ケーキをたいらげ注文していかれるのに四つめまでは何とかお付き合いできたのだが、それ以上はどうにも無理で、「私はもうこれでじゅうぶんです」と申し上げた時の、先生の残念そうな寂しそうなお顔「甘い物好きと言っていたくせに不甲斐ない奴」とでも言いたげな先生の表情に接し、申し訳ない気持ちでいっぱいになったこと、思い出は昨日のこのように蘇ってくる。

先生からいただいた、あの毛筆の美しい文字で書かれたお手紙の数々。私の拙論をご批評くださったこと、学生時代に父を亡くした時に励ましてくださったこと、私がこちらに着任してからしばらくの間、大学院の非常勤講師としてお招きしていた時のこと、奈良女子大学ご退官後の先生の最後の勤務地であった神戸女子大学に非常勤として呼んでいただき、先生の研究室で楽しくお話しさせていただいたこと、思い出の数々は今も心にある。

大学院時代に受講させていただいた授業では、明るいお声で、講義なさるのが楽しくて仕方ないという風情が、大学教員としては大変珍しいお姿に映ったものだが、今の自分を省みると、先生

の影響を多分に受けていることに気づかされる。毎週出されるレポートや宿題は過酷でもあったが、一言一句に拘って丁寧に作品を読むことの大切さを、先生から教えていただいた。先生から課していただいた課題の中では、川端の「掌の小説」の中の「金系雀」という作品、これは「私」から人妻である「奥さん」に宛てて書かれた書簡体の小説だが、この書簡の受取手の「奥さん」になりきって「私」に返信を書く(そういう体で、この作品の読解を示す)という趣向をこらしたものもあり、ほんとうに楽しく取り組ませていただき、研究の厳しさだけでなく、楽しさを存分に教えていただいたと思う。

横光利一、梶井基次郎、中島敦などについての御研究の数々、先生が近代文学研究史に残された足跡は偉大であり、我々は、今後も永くその御業績から学ばせていただくことであろう。

最後にお食事を一緒にさせていただいた時、食後に供された吉野の熟柿を喜ばれたことなど、さまざま思い出すにつけても、何とも言葉にならない思いがある。

今の自分は先生から受けたご恩に報いることができているとは到底言えないところにあります。ですが、その昔、京女への着任をご報告した際、たいへん喜んでくださり、「私もあそこに十年いましたから、あなたが行ってくれるのは嬉しい」と仰っていた

だいたお言葉を胸に、本学で教育・研究に精進してまいります。先生、ありがとうございました。

優秀論文発表会(五月十二日)

双子の栄華

—『木幡の時雨』の構想と趣向—

松村美咲

〈論要旨〉

双子は小説など様々な作品で描かれており、現代の私たちにとっては好感の持てる存在であろう。しかし、民俗学的に見ると、双子は長らく忌み嫌われる存在であり、その負のイメージの影響か、古典文学に見られることは数少ない。中世王朝物語『木幡の時雨』は、双子が二組も登場する希有な物語である。以下にその梗概を記す。実母からいじめを受ける中の君は、時雨の雨宿りを機縁に、中納言と契りを交わす。二人は将来を誓い合うが、母の奸計により、中納言は中の君の妹・三の君と結婚して、双子の女兒を生む。一方、中の君は当帝の息子・式部卿宮と結ばれ、双子の男児を生む。その後、中の君と中納言は運命的な再会を果

たし、三の君は姉の代わりに式部卿宮のもとへ入内する。やがて中の君腹の双子は帝と東宮、三の君腹の双子は女御となり、栄華を極める。

『木幡の時雨』の先行研究では、主人公らの栄華や交換・類似という観点から「双子」が論じられているが、それ以外の観点からは研究されていないため、さらなる検討が必要だと思われる。そこで本論文では、「家」と「物語の構想」を中心に『木幡の時雨』の双子の趣向について論じた。

中の君と三の君が双子を出産する場面では、その誕生が「二代の王」「二代の後」と祝福されている。言祝ぎにある「二代」は物語には見慣れない言葉であり、双子の構想の鍵となるのではないかと考え、用例を調べて検討した。その際、比較のために「二代」と同様の意味を持つ「累代」「重代」も併せて調べた。まず、古典文学における用例を調べたところ、「二代」は王朝物語には見えず、その用例の半数以上が天皇の代を指していることがわかった。また、どの言葉も中世の用例が最多で、特に軍記物語で用いられていることもわかった。これは中世に入って高まる「家」の意識の影響だと考えられる。

続いて、より詳細に検討するために、『平家物語』を取り上げて用例を調べた。その結果、「二代」の用例はすべて天皇の代を

指しており、「累代」は物を修飾する例、「重代」は物や人を修飾する例が多く、どちらも武家の「家」意識が感じられる言葉であることがわかった。各特徴を比べてみると、「二代」が天皇に関する言葉であることが際立って見える。『木幡の時雨』で「二代」が使われたのは、この言葉に「天皇の御代」というニュアンスがあるからであり、双子が連続で天皇・后となる構想が強調されているように思われる。

ところで、先に軍記物語と中世の「家」意識の関わりについて触れたが、軍記物語には命や個人的な感情よりも家や名譽を重視している表現が多く見られ、「家」意識が強く表れている。その軍記物語で多用されている「二代」は、中世の「家」意識が反映されている言葉と言えるだろう。さらに、中世王朝物語にも『いはでのぶ』など、「家」意識を問題とした作品がある。『木幡の時雨』も中世王朝物語の一つであるため、中世の「家」意識が反映されていると思えない。以上を踏まえると、『木幡の時雨』の双子の栄華は、「家」の繁栄を意識した構想であると考えられる。

ここまでの検討で「二代の王」「二代の後」は、双子が二代続けて帝と后になることによる「家」の繁栄を示していることがわかった。しかし、二代連続の即位・立后を達成するために、必ずしも

双子の設定が必要となるわけではない。なぜ『木幡の時雨』では「双子」が用いられたのだろうか。それには「一夜の契り」が大きく関わっている。「一夜の契り」は物語でよく用いられる構想であり、『木幡の時雨』で中の君と式部卿宮の逢瀬が一夜であるのも、その物語の型を踏襲したからだろう。一夜の契りで、二代連続の天皇即位を達成するための子どもを二人得るには、双子の設定が必要だったと考えられる。さらに、珍しい趣向を用いて、物語の面白味を増すねらいもあったと思われる。作者は物語の型を踏まえつつも、「二代」や「姉妹の入れ替わり」などの斬新な趣向を用いて「家」の繁栄を描いているが、「双子」の設定もそのような作者の工夫の一つと言える。今までの物語には見られない工夫を様々に凝らしたことで、『木幡の時雨』独自のおもしろさが生まれている。

〈論文執筆体験記〉

「卒業論文」と聞くと、当時の苦労や反省が脳裏に浮かびますが、そのような苦々しい思いも含めて、今となっては大学生活の中でも特に印象深い、よい思い出となっています。私の体験記が少しでも後輩の皆さまの参考になりましたら幸いです。

まず、私が反省から一番学んだことは、計画を立てて早め早めに取り進むことの大切さです。四回生は実習や進路のことなどで

何かと忙しいので、卒業論文に割ける時間は想定以上に少なくなってしまう。だからこそゆとりのある計画を立てて、早い段階から行動することが重要になってきます。

私は卒業論文を自分の手で書きたいと思っていたので、人一倍早く下書きを終え、清書に着手しなければなりません。そこで、自分で期限を提出締め切りの一週間前に設定して取り組んでいました。しかし、資料集めに時間をかけすぎたために、下書きに取りかかるのが遅れてしまい、その結果、清書を始めたのが締め切りの前日になってしまったのです。期限が刻々と迫っていたので寝食を忘れて、死にもぐるいで書きました。手も心も折れそうになるし、見直しをしっかりと私なりに完璧な状態に出したいと考えていたのですが、少々心残りがあるまま提出することになってしまいました。きちんとした計画を立ててもっと早くからやるべきだったと非常に後悔し、その大切さを痛感しました。締め切りの数日前は、通常の三倍以上のスピードで時間が過ぎ去ります。時間的にも精神的にも余裕を持って執筆・提出できるように、早めの行動を心がけてください。

資料集めについては、たくさん書物に触れるよい機会と思いい、楽しんで取り組みました。少しでも関係がありそうな文献には目を通すような心がけていたのですが、そうして地道に集めた資

料が行き詰った時にヒントを与えてくれました。幅広い視野で文献を収集しておく、アイデアが広がるかもしれません。先行研究に関しては、私は夏休みまでに一読しておきたかったので、四回生の前期の間に論文をすべて収集しました。『木幡の時雨』の先行研究数は四十本ほどでそう多くありませんが、集めるだけで一週間以上かかりました。資料が大学にない場合、他の図書館などに足を運んだり、取り寄せたりしなくてはならず、時間を要します。必要な資料がいつでもすぐ手に入るとは限らないということとを念頭に置いて、早い時期から収集しておいたほうがよいと思います。

論文を執筆する上で、ゼミなどでの発表がとても役立ちました。頭の中では考えがまとまっていなくても、いざ発表してみると手に伝えられない・伝わらないということがあり、苦悩した覚えがあります。しかし、発表や質疑応答を通して、その状態を自覚し、客観的な目で自分の論を見つめ直せたことが、論文を論理的にまとめるのに大いに活きました。先生やゼミ生の指摘や質問からは、多くの学びと気づきを得ることができてよい刺激になりましたし、新たな視点を得られることもあって楽しかったです。また、別のゼミに所属していた友人とは、図書館のグループ学習室を利用して、プレゼンテーション形式で内容や進捗の報告をし合

いました。他分野の視点からの率直な疑問や意見によって、見落としや不明点に気づくことができましたし、交流も深めることができ、よい時間を過ごせました。

完成まで何度も行き詰ったり諦めかけたり、紆余曲折ありましたが、坂本先生のご指導や友人・家族の励ましと支えのおかげで、最後まで乗り切ることができました。卒業論文を通して、『木幡の時雨』に一生懸命に向き合い、そのおもしろさに気づけたことは私の財産になりました。きっと後輩の皆さまも、たくさん努力の中に、作品や言葉を研究する楽しさを感じられると思います。体調管理をしっかりとして、楽しみながら満足のいく論文を仕上げてください。

芥川龍之介「袈裟と盛遠」論

― 眼の役割と「憐む可き女主人公」について ―

森 由 佳

〈論提要〉

芥川作品には、古典文学を題材にした作品が数多く存在しており、「袈裟と盛遠」もその一つである。芥川は「袈裟と盛遠」の登場人物である袈裟のことを、「憐む可き女主人公」(『芥川龍之介全集 第四巻』平成八年二月八日 岩波書店、七三頁)であ

ると評している。卒業論文では、「袈裟と盛遠」で多く描写されている眼の役割と、芥川が描いた「憐む可き女主人公」とはどのような女性であったのか考察した。

「袈裟と盛遠」の原典となった『源平盛衰記』の文覚発心の条は、『本朝女鑑』等に収載されて、「袈裟と盛遠」の発表当初、広く一般に流布していた。「袈裟と盛遠」と『本朝女鑑』とでは、物語の内容や人物像が大きくかけ離れている。このことに注目し、当時流布していた物語と「袈裟と盛遠」との相違点について検討した。その結果、『本朝女鑑』では描かれていない袈裟の容貌の衰えが、「袈裟と盛遠」では強調して描かれていることや、『本朝女鑑』での袈裟が、周囲のため自己犠牲をも厭わない女性として描かれているのに対し、「袈裟と盛遠」では、盛遠からの評価や盛遠への感情を自己の主軸に置いている女性として描かれているという二つの大きな相違点が見受けられた。

以上の相違点から、「袈裟と盛遠」における袈裟の容貌の衰えが担う役割について検討した。そして、容貌の衰えは、袈裟の眼を強調させる役割を担っていることが分かった。「袈裟と盛遠」では、眼の描写が多くなされている。そこで、眼の描写がなされることで、どのような効果が齎されているのか考察した。作中には、盛遠が袈裟の復讐を恐れており、そのために渡を殺害せず

はいられない心情が、眼を通して袈裟に正確に伝わっている等、眼の描写に伴って、両者の意思疎通が図られていた。このことから、「袈裟と盛遠」の眼の描写は、相手の心情を伝達する役割を担っていることが分かった。二人の独白によって物語が進んでいく「袈裟と盛遠」にとつて、意思疎通を可能にする眼の役割は極めて重要である。

眼の描写に伴って、両者は互いの心情を正確に読み取っていたが、「袈裟と盛遠」では、物語の最後の場面のみ、互いの心情が正確に伝達されていない。物語の最後では、盛遠は自問自答を繰り返す中で、袈裟への愛を自覚するが、袈裟はその心情を正確に受け取ってはおらず、盛遠に虐まれ果てていると認識したまま物語は終了する。最後の場面でのみ、なぜこのような齟齬が生じたのか考察した。これまで両者が意思疎通を図っていたのは、袈裟と盛遠が一間という狭い空間内で対面し、互いの眼を確認していたためであり、それに対して、盛遠が袈裟への愛情に思い至った時には、すでに袈裟と別れた後であり、両者が互いの眼を確認することは不可能な状況にあった。そのため、両者の独白の最後のみが、互いの心情が伝達されず齟齬が生じる結果となったということが考えられる。その後、袈裟は室内の灯を吹き消してしまっており、盛遠が袈裟の夫を殺害しに忍んで来たとしても、お互い

が眼を合わせることは不可能である。その後の展開は記載されていないが、原典や烈女伝でも語られている通りに、盛遠は袈裟が夫の身代わりになっていることに気付かないまま袈裟を殺害することになると推測できる。

これらのことから、芥川が描いた「憐む可き女主人公」とは、盛遠からの評価や感情を自己の主軸に置いていた袈裟が、盛遠の眼を通して正確に盛遠の心情を理解出来ていたのにも関わらず、盛遠の袈裟への愛の自覚についての、互いの眼を確認することが出来ない状況であったために知ることが出来ず、盛遠に虐められていたという認識のまま、死を迎えるという姿にあると考えられる。このことから、「袈裟と盛遠」の眼の描写は、両者の独自の間に通路を結び、相手の心情を伝達する役割だけでなく、袈裟を「憐む可き女主人公」として強調する役割も担っていることが分かった。

〈論文執筆体験記〉

卒業論文執筆にあたって、私が最も苦労したことは、先行研究で論じられていない新しい観点を見つけることです。

私は、卒論で実際に論じたテーマとは違うテーマを、執筆当初、設定して調査を進めていたのですが、作品分析を重視するあまりに、夏季休暇に入るまで、先行研究を全く読んでいません

した。その結果、当初設定していた卒論のテーマが、先行研究でさかんに論じられている内容であると感じくのが遅れてしまいました。最初に設定していたテーマが使えないとなると、どうしてもモチベーションが下がってしまいますし、今まで行ってきた調査を新しいテーマにも活用したいと思ってしまうので、新たに別のテーマを見つけることは苦労することになります。

そこで、卒業論文執筆にあたって、皆さんに気を付けて頂きたいことは、まず先行研究でどのようなことが論じられているか早めに分析しておくことです。そして、早めに卒論の全体の論の流れを決めておくことが重要です。

私が新しい論点を見つけるために、先行研究分析の際に行ったことは、集中して四日間ですべての先行研究を読みきることです。先行研究を読む期間が長くなれば長くなるほど、最初に読んだ先行研究を忘れていきますので、短期間で一気に読んでしまった方が頭の中でも整理がしやすくなります。そして、ただ読むだけでなく、一本の論文を読むごとに、論文で論じられている内容で、自分の考えとは違う部分があるなら、なぜ違うと考えるのか、自分の考えはどういったものなのか、賛同できる論なら、こういった点が賛同できるだとかを、論文に直接書き込んでいきました。また、先行研究で論じられている内容の概要を、別紙に

記述していき、それぞれの先行研究がどの様なことを論じているのかすぐに確認できるようにしていきました。私の場合、その過程で新しい論点が見つかって行きましたので、新しい論点を見つけることに苦労した際には試してみてください。

卒業論文の論の流れがある程度決まり、論文の形が出来た際には、友人と定期的に卒論を読み合って、文章の書き方だとか、論に納得できるかできないかだとか、形式が京女指定の形式に従っているか等について意見交換をしていくことも重要だと思いません。

皆さんも、行き詰った時には友人を頼りながら、体調に気を付けて頑張って頂けたらと思います。

『和漢朗詠集』四一五番

「霞晴れ」歌における「いとゆふ」考

—「遊糸」との関係を中心に—

小林 真 歩

〈論文要旨〉

藤原公任が編纂したと言われる『和漢朗詠集』には四一五番「霞晴れみどりの空ものどけてあるかなきかに遊ぶいとゆふ」という歌が記載されている。そして本論文では特に「いとゆふ」

という語に着目し検討していく。本論文の目的は二つある。一つ目は四一五番「霞晴れ」歌内での「いとゆふ」が「蜘蛛の糸」と「陽炎」のどちらの意味であるかということ結論づけることである。二つ目は「いとゆふ」に漢字を当てはめた場合、「遊ぶ糸」と湯桶読みの不自然な語句になる。これはどうして成立したのか、そしてどういった意味になるのかを検討し結論づけることである。

四一五番「霞晴れ」歌は、春の季語である「霞」が用いられていることから分かるように、春の風景を詠んでいる。そのため、「いとゆふ」は春の景物である「蜘蛛の糸」や「陽炎」の意味で捉えられる。「蜘蛛の糸」は「いとゆふ」の元となった語句である。「遊糸」が春の景物として詠まれていることから、同じく春の景物であると言える。また、「陽炎」は春に見られることから春の景物であると言える。

四一五番「霞晴れ」歌内の「いとゆふ」自体について検討していく前に、「いとゆふ」の元となったとされる「遊糸」の意味について検討していく。「遊糸」は中国の漢詩で使用され、後に日本の漢詩でも使用されることになる。そして和歌の中でも「遊ぶ糸」として訓読され、更には「遊ぶいとゆふ」、「いとゆふ」と形を変え使用されていっている。そのため、「遊糸」が「いとゆふ」

の元になった語であると考えるのは妥当である。「遊糸」はまず中国の漢詩で「蜘蛛の糸」の意味で使用されていた。そして日本の漢詩でも使用され、中国の漢詩と同じように「蜘蛛の糸」の意味で使われていると言える。

漢詩で使用されていた「遊糸」は、やがて和歌にも使用されることとなる。和歌では「遊糸」とそのまま使われるのではなく、「遊ぶ糸」と訓読され詠まれている。そして和歌内で「遊ぶいとゆふ」、「遊ぶ糸」、「いとゆふ」と形を変え、使用されていた。『和漢朗詠集』以降に編纂された『永久百首』『為忠家初度百首』『六百番歌合』内の和歌での「遊ぶいとゆふ」、「遊ぶ糸」、「いとゆふ」は全て「蜘蛛の糸」の意味である。しかし、時代が下っていくにつれ、「蜘蛛の糸」に似た春の景物である「陽炎」と意味が混合されたことが『六百番歌合』内の歌などから窺える。

また、「いとゆふ」という語句は散文にも使用されており、『和漢朗詠集』が編纂されたと考えられる時代の作品では『宇津保物語』や『狭衣物語』といった物語の中で使われている。その際の「いとゆふ」は「服飾語彙」として使用されている。そのため、仮に物語内の「いとゆふ」に「蜘蛛の糸」や「陽炎」の意味を当てはめても意味が通じないのである。

以上の検討から、『和漢朗詠集』四一五番「霞晴れ」歌内の

「いとゆふ」は「蜘蛛の糸」の意味で使われていると言える。また、「遊ぶいとゆふ」という湯桶読みの不自然な語句は、漢語「遊糸」を訓読した「遊ぶ糸」と、元々日本にあった「服飾語彙」である「いとゆふ」が組み合わされることによって成立したと言える。そして「遊ぶいとゆふ」と和歌内で使用される際に、「服飾語彙」としての意味は消え、「蜘蛛の糸」という意味だけが残ったと考えられる。

〈論文執筆体験記〉

楽しかった大学生生活の終わりに、一種の壁として立ちはだかる卒論執筆。それが「辛く何も得られない体験」ではなく、「成長の糧となる体験」となるように、僭越ながら卒論執筆に関しては先輩である私から後輩の皆さんに、三つ助言を致します。

一つ目は「題材決めはなるべく早く」です。就活でも、教授でも、院試でも早くから行動することがよい結果を生み出します。私が「いとゆふ」を卒論の題材にしようとしたのは、三回生後期のゼミでたまたま四一五番「霞晴れ」歌の担当になり、ゼミの発表に向けて色々調べていくうちに、調べても分からないことが多くあったからです。そして「いとゆふ先輩に関する問題を解決して、私は卒業する」と決意し、卒論の題材に選びました。私は三回生の後期にはもうテーマが決まっており、また先行研究集め

や用例調べもゼミの演習でやっていたため、ものすごくは苦勞しませんでした。しかし、同じゼミの学生で、中々何を卒論の題材にするのが決まらず苦勞している姿を何人も見ました。そのため、出来れば卒論執筆、年度前の春休みには、どの時代の、何を題材として書くのかを決めておくその後々楽だと思えます。また題材が決まった際には、一緒に必要な先行研究集め、用例集めなどをしておくとも更によいです。

二つ目は「必要なツールを知っておく」ということです。卒論執筆年度の一年間は思っている以上に忙しいです。そのため、多くの情報をすぐに手に入れたり、時間を節約したりするためにも便利なツールを知っておくということが大切になります。例えば、先行研究について調べたい時に、「CINII」だけで検索するのはなく、「国文学研究資料館」の「国文学論文目録データベース」を使うと、今まで見つからなかった自分の卒論の題材に必要な論文が見つかることもあります。また、漢文の分野ですと、『藝文類聚』や『文選』などから用例を探す場合、勿論書籍を引く張つてきて一ページ一ページ捲る方法もあり、それはそれで大切な作業だと思います。しかし、時間がなく端的に探したい時には、「台湾中央研究院漢籍電子文獻」内の「人文資料庫師生版一・二」を使うと便利です。このように、自分の時間を有効に使

うためのツールは様々ありますし、自分ではどこにあり、またどう使つたらいいのかわからない時も出てくると思います。その時は学生同士の交流やインターネット上でのやりとりだけでなく、その分野の専門家である先生方には是非質問しにいつてください。便利なツールの使い方の他に、自分では思いつきもしなかった調べ方や視点などが得られるかもしれません。

三つ目は「体調管理はしっかりと」です。何分卒論執筆の他にも、自身の将来に関わることに關して行動しなくてはいけない年です。自分が思っている以上にストレスが溜ります。更に季節の変わり目に卒論の締切があるため、体調も崩しやすいです。私は卒論の締切前に風邪をひいてしまい、大変な思いをしながら最後の仕上げをしたことを覚えています。卒論を確実に出すためにも、ちゃんと栄養のある御飯を食べ、質のよい睡眠をとり、疲れを感じたら休むことを忘れないでください。また行き詰まったと感じたら、自分だけで抱え込まず、なるべく早く周りの人に頼りましょう。

卒論執筆は苦しいことも多々ありますが、分からないことが分かった、自分の考えていたことが筋を立てて説明出来たといった達成感も味わえます。是非自分にとつて実りのある体験になるよう、下準備を早めにと共に、体調管理に気を配って乗り越え

てください。先輩として、皆さんを心から応援しております。

現代方言「ご無礼しました」用法の

細分による共通語との区別

矢野 祥子

〈論文要旨〉

現代人の多くは「ご無礼しました」という言葉に対して、大河ドラマや時代劇で使われる古語のイメージを持つのではないだろうか。自身が使うことはないが、世代によっては、全く聞きなれない言葉というわけでもなく、辞書をひかなくとも謝罪の意味だと了解しているだろう。一方、先に挙げたような演劇者を除き、現在でも日常的に使用している人がいる。実際に、筆者の父は風呂から上がる際に「ご無礼しました」と言っている。日頃から使う人に方言という認識は無いかもしれない。しかし、方言研究で著名な藤原与一氏は『日本語方言辞書』にて「中部地方では、この慣用の比較的著しいものが見られようか」と述べている。そこで、本稿では中部地方に属する岐阜・愛知県下にみられる「ご無礼しました」を取り上げ、二県でみられる「比較的著しいもの」が方言としての用法であるという立場から、共通語と方言の用法の違いを明確にし、区別の方法を導き出すことを目的とす

る。なお、ここでいう共通語とは、「無礼」の意味である「不躰」が慣用化して「申し訳ありません」という謝罪の意味をもつ語のことを指す。調査方法としては、まず二県から刊行された地誌や方言集の方言の章節等をあたり「ご無礼しました」の例を収集する。次に、使われる場面毎に分類を行い、地図上に反映するといふものである。

用法を分類してみると、二県で共通して、入浴の前後、辞去、食事、ご無沙汰、遠慮の場面で使用されている。愛知県からは、極めて少数ではあるが、優越と呼びかけの例もみられた。更に、地図に表すと、方言が分布する地域の特長がみられ、岐阜県では、特に美濃地方において語の勢力が強いことが分かる。また、同県は、風呂で使われる例が最多の十例であった。この結果は、貰い風呂の慣習や地誌編纂の意図が関係していると考えられる。愛知県では尾張・名古屋・三河地域に分けた場合、全域から例を収集することができた。中でも辞去の例は、県内では比較的多い三例である。二県の共通するところは、岐阜市・大垣市・名古屋と市といった、人口が集中する地域に複数の用法が存在しているということだ。加えて、使用年代の観点からみると、嘉永三年（一八五〇）生まれの女性が使用していた可能性もあることから、約一六〇年前から、現在方言と思われるものが存在していたとい

える。少なくとも、一〇〇年前から使用されていた事は明らかであるが、収集した資料の限界から、書誌上では明治までしか辿ることができなかった。

以上、複数の用法から、謝罪の意味が前面にでない場合でも使われるものが方言だといえると考えた。しかし、共通語と方言の区別は難しい。何故なら、「ご無礼しました」は、時代の変遷と共に方言化した語であると、岐阜県の方言研究を専門とする山田敏弘氏が述べるように、元々は共通語であり、完全に切り離すことは不可能であるからだ。また、方言は謝罪の意味が前面にでないにしても、程度の差はあれ謝罪の意味が含まれているようにも捉えることができる。それでも、方言だと指摘されるかには、共通語との間に何らかの違いが見出せるだろう。二県から収集した例を俯瞰してみると、風呂の場面の「ご無礼しました」は、「入りました」、辞去の場面は「帰ります」と言い換えることができる。共通語と方言の区別をする方法は、この言い換えの可否にあるのではないかというのが筆者の結論である。

〈論文執筆体験記〉

〈卒業論文のテーマ設定について〉 国語学ゼミでは、興味があ

氏による文章心理学、坂木司氏「和菓子のアン」で登場する「甘酒屋の荷」(ごとわざ)を取り上げ、ゼミで発表をしました。例の通り、文字に関することであれば、作品でなくとも、全てが対象になるという国語学の対象範囲の広さや自由さが好きでした。そして、国語学を通じて、身近にありすぎて気が付かない文字に対する疑問に目を向けてみるこの面白さを知りました。(例えば、「君が代」の君は誰を指すのかなど)そこで卒業論文のテーマは、日常を振り返り、自身も使う方言に設定することにしました。ゼミが決まった当初は、ことわざか隠語(スルメをアタリメということなど)を取り上げる予定をしていましたが、自分の興味に身を任せた結果大きく変更をしました。同ゼミの友人からは「方言一語(ご無礼しました)」で卒論を書くには、文章量が足りそうにないし、難しいからやめた方がいい」と言われましたが、興味ある分野だからこそ頑張ることができると思いました。資料収集に行き詰まりを感じた時は山中先生から助言を頂き、迷った時は「結局、父はどうして『ご無礼しました』なんて言っているんだろう」と簡単な自問をして、不安を感じた時は「どこかで、誰かが、今も使っている言葉ではあるんだ」と言い聞かせて、絶対に資料は出てくると信じました。テーマが絞れていないことに誰でも不安を抱くと思いますが、逆を言えば、打ち込める

テーマが見つければ卒論に夢中になれると思います。これまでの発表や講義の中にテーマ設定のヒントがみつかるかもしれません。実際に私は、講読近世を受講していたので戯作について知識が増え、形にはなりませんでしたが調査に活かすことができました。友人との雑談も役に立つと思います。何ごとも、楽だからという選択理由でなければ険しい道も少しは楽しめるものになるはずです。

「私が一番後悔したこと」ある参考文献の中で、「文字を書くことは恥をかくこと」という内容の文章に出会いました。「かく」にかけた作者の遊び心と本音がみえる文章であり、内容に同感したことを覚えています。私が卒論に関して、後悔していることの一つは、下書きが完成した時点でゼミの先生や友人に読んでもらい、多くの意見を頂戴することを怠ったことです。自分の考えや文章を見てもらうことは、勇気があることですが、論文の内容や文章の質を高める為にも、添削は必須です。これは就職活動の履歴書や自己PRも同様です。また、添削の時間は自分で作りださなければ生まれませんので、書ける所からでもいいので、早く文章化する努力が必要です。「文字を書くことは恥をかくこと」と述べた著者は、「それでも自身の考察を書き留めたい」と続けます。一生の内、一回の卒業論文になるのかもしれないのだから、

夢中になれるテーマをみつめて、作者のような熱量をもって執筆に臨むことができたら幸せですね。最後に、藁にもすがりた思いをしている四回生の皆さん、「卒論とは期限ギリギリまでするものです」（山中先生より）自身が納得するまで取り組んで下さい。「真剣にはなつても深刻にはならない」（寮監督より）で下さい。国文学科の一卒業生として、応援しています。

慶滋保胤「為二品長公主卅九日願文」論

—平安朝中期追善願文の中における位置づけ—

小西 洋子

〈論文要旨〉

「為二品長公主卅九日願文（二品長公主にほむちみちうしつみの為の卅九日願文）」『本朝文粹』・卷十四・四一九は、寛和元年（九八五）六月、尊子内親王の四十九日の法会に際して書かれた追善願文である。作者は慶滋保胤である。本論では、この願文について論じた。

はじめに、願文、慶滋保胤、尊子内親王についてそれぞれ簡単に紹介しておく。

願文とは、仏事を行う際に執筆された漢文の文体。華麗な駢文で、詩句や故事が多彩に用いられる。神祠修善、供養寺（寺院の建立）、雑修善（経典の書写など）、追善（忌日法会）等に分類さ

れる。中国に明確な起源はなく、日本独自のものとされる。平安朝全期にわたって作成され、重要な位置を示した。多くは文人が願主の依頼を受けて執筆する。書き手の立場は、文人ではなく、願主であること（作者が願主の意を代筆しているということ）が通説である。

慶滋保胤（九四三？～一〇〇三）は、平安中期の文人官僚。早くから詩文に秀で、花山朝では大内記を務め、五位に至った。その一方で、勸学会の中心メンバーであり、天台僧源信らと交流するなど、浄土信仰に熱心であった。そして、寛和二年（九八六）四月、突然出家を遂げた。出家の動機は、浄土信仰への傾倒と同時に花山朝の挫折が大きな要因とされる。

尊子内親王（九六六～九八五）は、冷泉天皇の娘、花山天皇の姉、円融天皇の妃。十五歳で叔父である円融天皇の後宮に入内するが、入内から二年後、突然剃髪した。その後、わずか二十歳で没した。出家した尊子に、源為憲が『三宝絵』を献上したことが良く知られている。

さて、本願文は、追善願文という視点から見ると特異な点が二点ある。一点目は、尊子の描かれ方である。願文の後半（四八～六〇行目）には、尊子の臨終を描いている場面がある。そこには、尊子が臨終時に往生行を行い、西方浄土へ往生を遂げたこと

が描かれている。しかし、このような場面は、他の追善願文には見られず、特異な場面なのである。一点目は、願主の問題である。実は、本願文には願主の記載がない。つまり、願主が分らないのである。

本願文は、保胤の浄土思想や仏教理解という視点から言及されることがある。だが、何れも、本作品が追善願文であることに着目しておらず、単独の作品論として論じられたことはない。本論では、尊子の臨終の場面と、願主の問題、この二点について検討した。本論は、全六章で構成した。以下、各章の概略を述べる。

一章では、右に述べた本願文の特異性を指摘した。

二章では、一般的な追善願文には、悲嘆表現があり、故人の死が哀傷的に描かれること指摘した。それに対して、本願文には、悲嘆表現がなく、尊子は往生を遂げた者として理想的に描かれている。この特異性を他の追善願文と比較することで明らかにした。

一節では、尊子と身分の近い、后妃、法皇、僧のために作成された願文を検討した。これらにも悲嘆表現があることから、身分や出家の有無に関わらず、故人の死を哀傷的に描くことが、一般的な追善願文の様式であることを論じた。

二節では、同じく保胤が作成した「為大納言藤原卿息女女御卅

九日願文（大納言藤原卿息女女御の為の卅九日願文）（『本朝文粹』巻十四・421）を取り上げた。この願文にも、悲嘆表現があった。保胤が作成した追善願文の中でも、故人の死を哀傷的に描いていないのは、本願文に限った特徴であることを明かにした。

三章、四章では、本願文の尊子の臨終の場面を詳細に考察した。

三章では、保胤が執筆した『日本往生極楽記』との関わりを論じた。『極楽記』と本願文は、同時期に執筆されている。この中の往生者に、尊子の臨終時の行動（西を向く、几に寄りかかる、十念をする）と同様の行動をしている者があることを指摘し、尊子も往生者として描かれていることを述べた。

四章では、尊子の臨終の場面と源信著『往生要集』の関連性を論じた。『要集』の完成時期も尊子の死の二ヶ月前であり、本願文の制作時期と近い。

一節では、尊子の臨終時の行動と『要集』の「臨終行儀」の項目を考察した。尊子が臨終時に行った「十念」という念仏作法は、ここで説かれている。さらに、尊子の臨終から往生までの一連の過程が、源信がこの項目で述べる「勸進の言葉」と同様の構成であることを述べた。

二節では、本願文の「便是綺窓瞑目之時寧非蓮台結跏之日」

（五三・五四行目）が、『要集』の「聖衆来迎楽」の項目の「草菴瞑目之間 便是蓮台結跏之程」と類似していることを指摘した。これらの文には、他に出典となる箇所がなく、両者に直接的な関係がある。ただし、『要集』は主に内典の要文を集めているので、文飾のある願文（外典）を参照するとは考えにくい。従って、保胤が『要集』を参考にしたと考えた。

三節では、右に述べた部分で、『要集』では「草菴」となっている部分が、尊子の願文では「綺窓」となっている点に着目した。「綺窓」は、あや絹を張った窓のことで、女性の居室に用いられる。つまり、尊子が女性であることを意識して用いられたのである。保胤は、『要集』の文をそのまま用いている訳ではなく、尊子に相応しい語で表現しているのである。

五章では、本願文の願主を検討した。

一節では、『小右記』にある尊子の四十九日の法会に関する記事を考察した。そこには、花山天皇、冷泉天皇、円融天皇から布施があったことが記されていた。ここから、天皇が願主であった可能性が推察される。

しかし、天皇を願主と推定すると、問題点がある。願文には、「公主者、先太上皇之女、後太上皇之妃、今陛下之姉。」（二七・三〇行目）と天皇の尊称が詠まれているのである。この点は、願

文が願主の立場で書かれるという通説と矛盾するように思われる。

そこで、本願文は、作者の保胤の視点で書かれていると考えた。追善願文が執筆者の視点で書かれる場合は、作者自身が願主である〔自筆願文〕と、天皇や中宮が願主である場合がある。後者は稀な例である。以下の節では、本願文がどちらの可能性があるのか検討した。

二節では、〔自筆願文〕の可能性を考察した。しかし、〔自筆願文〕は、被供養者が作者の息子や母である場合に作成されている。尊子と血縁関係のない保胤が、内親王である尊子の願主になるとは考えにくい。本願文は、〔自筆願文〕ではないと考えた。

三節では、後者の可能性を検討した。天皇が願主の場合は空海、中宮の場合は道真が作成した願文にそれぞれ一例ずつ見られた。さらに、これらは被供養者がそれぞれ、親王と内親王であった。尊子も内親王なので、この可能性が妥当であると考えた。

四節では、願主と被供養者との関係と悲嘆表現の関わりについて述べた。

第六章では、結論と今後の課題を述べた。

本願文は、追善願文において、故人の往生を描いている点が特異である。そして、願主は、おそらく天皇であろう。さらに、そ

の場合に作者である保胤の立場で書かれた、例外的な願文と考えるのが自然であろう。

尊子の死は、偶然にも、保胤自身が『極楽記』を編纂していた時期でもあり、『要集』が完成した直後でもあった。保胤の出家も、この翌年である。本願文は、保胤が最も浄土信仰に傾倒していく時期に執筆されたのである。

往生者というのは、出家した尊子にとって相応しい姿であった。だが、それ以上に、当時の保胤にとっても最も理想的な姿であった。追善願文で、故人の往生が描かれたのは、何よりも、その作者が保胤であったからである。

本願文には、保胤の浄土思想が色濃く反映されている。しかし、それが、追善願文というジャンルの中にあることを見逃してはならない。本作品は、追善願文で故人の往生を描いている点に、最も独自性を見出すべきであろう。保胤の浄土典籍の知識と詩文の才覚が顕著に窺える作品である。

〈論文執筆体験記〉

修論の執筆で最も苦労したことは、論文の構成や文章の表現である。テーマが決まった時点で一息ついてしまった。その結果論文を書き始めるのが遅くなり、推敲する時間を取ることが出来なかった。頭で考えていたことを実際に文章にすると、無意識の

うちに自分の都合の良いように辻褃を合わせていた部分も多くあり、書き始めてから新たに気がつくこともあった。また、集めていた論文もざっと目を通していた程度で、細かく確認していなかった。先行研究に引きずられたくないという当初の志が仇となかった。提出直前になってから、自分の論は、既に指摘があるのではないかという強迫観念に駆られ、心身ともに疲弊した。

これから卒論を執筆される皆さんは、どうか私のようにならないよう、少しでも早く準備を始め、計画的に取り組んで下さい。また、気が付いたこと、疑問に思ったことなどを日頃から文章にする習慣を付けておくと良いと思います。論文の執筆には、体力と気力が必要です。体調には、くれぐれも気をつけて、自分の納得のゆく論文にして下さい。

卒業論文を書く時に

三回生 田 北 真智子

二〇一八年度の優秀論文発表会に参加して、一番有意義だと感じたのは、卒業論文に関して、現実的なイメージを持つことが出来たという点です。

実際、自分が卒業論文を書くことになるのは一年後のことで、遠い先の話ではないのですが、毎年行われている優秀論文発表会

で諸先輩方の発表を聞かされた時に、こういうしつかりした論文を自分が書けるわけがない、自分は卒業できないかも、と正直考えてしまっていました。

しかし、今回の優秀論文発表会に参加したことで、一つ対策を見つけました。とにかく早く取り掛かるということです。どの先輩もそれだけは口を酸っぱくしておっしゃっていました。

四回生は実習などでとにかく忙しく、時間が全然足りない、有限なのはわかっているのに最終的にぎりぎりになってしまった、など。ある先輩は、清書を手書きで行ったそうなのですが、清書にとりかかったのが提出前日だったとおっしゃっていて、我がことのように怖くなりました。

具体的には、三回生の春休み期間中に資料を集め始めておくといい、とのことでした。絶対実行しようと肝に銘じながらお話を聞かせていただきました。

それから、卒業論文は書式が特殊で、書式を整えるだけで時間を取られてしまうということ、だから手書きで書く人もいるのだということは、今回で初めて知ることができました。書き上げてから一か月ほど余裕があるといい、と教えていただき、大変参考になりました。

また、卒業論文は最終的に冊子の形になる、と言って、実物の

冊子を見せていただきました。卒業論文を書く上でのメリット教えてください、という質問で、「自分の書いた論文が本の形になるのは良い」「少し、かつこいいものを作ったという気分になれる」「自分あの時こんなに書いたんだ、とあとで自信になる」とおっしゃっていて、確かに少しかつこいいかも、と魅力に感じました。今書いているものが後で本になる、というのは、一万字絶対書かなければいけない、と思つて書くよりも、幾分か素敵なモチベーションになると思います。

発表会後の茶話会で、先輩方との交流の時間が取れたことも、自分にとってプラスになりました。

教育学部の大学院に進まれた先輩から大学院でのお話を聞いたのですが、やることが多くて本当に大変だとおっしゃっていて、確かにお忙しそうだと思つたのですが、それでも先輩はどこか楽しそうにお話をしておられて、稚拙な表現ですが、好きなことをしている人はキラキラしているというのを生で感じました。自分は大学院ではなく就職を考えている身ですが、それでも先輩のように、好きなことをして輝く女性になりたいと感じました。

優秀論文発表会に参加するのは今回で二度目ですが、茶話会に参加したのは初めてで、とてもいい刺激になりました。来年の今頃には、きっと卒業論文を書いているところです。今回聞いたこと

を活かして、卒業論文に取り組みたいと思います。発表してくださった先輩方、開催してくださった先生方、ありがとうございました。

優秀論文発表会に参加して

四回生 箆 橋 麻衣子

今回、優秀論文発表会に参加して非常に多くのことを学ぶことができた。四回生になったというものの卒業論文に対して具体的なイメージが掴めず、どのように卒業論文を進めていくべきか悩んでいた私にはこの発表会は大変有意義なものとなった。

様々な先輩のお話の中で共通していたのは、「卒業論文の準備はできるだけ早く始める」ということであつた。四回生になると就職活動や教育実習が始まって忙しくなり、思うように調査を進めることができなくなるため、とにかく早く早めに準備をし、締め切りに余裕をもって書き上げると良いとのことであつた。特に、先行研究の調査は早めに行うべきであるということも分かつた。また、矢野祥子先輩のお話で、先行研究や文献を見つけた際にはコピーをしてノートに貼っておくという方法の紹介もあり、このように自分が調べたことをこまめに整理しておくことも重要であるのだと思つた。

また、卒業論文を書く楽しさについては、「これだけの分量を書きこいで自信がつく」と先輩方は仰っていた。卒業論文に着手したばかりの今の私は、先行研究がなかなか集まらなかつたり、思うように文章がまとまらなかつたりとあまり楽しさを感じることは出来ていないが、調査を粘り強く進め、新たな発見をしたり卒業論文を書ききる達成感を味わいたかった。

先輩方の論文発表を聞いて、一つの作品だけでなく様々な作品と比較していることや、国文の分野だけでなく仏教とも絡めて調査していたことが分かった。小西洋子先輩の修士論文は、平安期の漢文と仏教を絡めたものであり、私も文学作品と仏教を絡めて書きたいと思っていたため参考になった。論文を書く際にはこのように多角的な視野を持つことが重要だと考えた。また、そのような視野を持つためにも、幅広く様々な分野について学ぶべきであるということも分かった。私は今四回生であるから、今までの三年間で学んできたことを駆使して卒業論文に取り組みたいと思った。

また、発表会後の茶話会では、先輩方と気軽にお話や質問をすることができ、こちらも非常に有意義な時間となった。先行研究の調査の仕方という卒業論文に関することから、進路についてなど実際に経験された先輩の話をよく聞くことができたのは本当に

良かった。

優秀論文発表会は茶話会も含め、本当に多くの学びや気づきがあり、参加してよかったと思えるものであった。ただ、四回生になってから初めての参加であったため、もっと早い段階から参加しておけばよかったとも思った。この発表会に参加することで卒業論文に対して具体的なイメージが持て、早いうちから卒業論文の準備に取り掛かることもできる。是非一回生や二回生など早い段階から参加してほしいと思った。

新入生歓迎行事能楽鑑賞会（五月二十六日）

百聞は一見に如かず

一回生 澤田 明日香

私は生まれて初めて能を鑑賞した。演目は「橋弁慶」だった。以前に狂言を観たことがあるものの、能と狂言はどう違うのかはよく知らなかった。もちろん、今までに学校の授業で学ぶ機会があったが、そこで得たものは、私の中で、能はどこか縁遠い世界であるというイメージだった。そんな先入観を吹き飛ばしてくれたのが、河村さんのお話だった。「能と聞くと敷居の高い伝統芸

能というイメージがありますが、お客さんが面白いと感じられるからこそ六百年以上も続いています。」という言葉がとても印象的だった。更に話はこう続けられた。「能が扱っている題材は、現代の我々にも通じるような極めて新しいものです。」と。私はその言葉に衝撃を受けた。それと同時に能に対する興味が俄然として湧いた。また舞台上での演者の動き方についても教わった。演者は舞台上ではなるべく動かないのだと言う。これは恐らく海外のオペラやミュージカルなどとは一線を画す点であろう。無駄な動きを極限まで削ぎ落し、必要最小限の動作一点にのみ力を注ぐ。するとその動きに恐ろしいほどの力が宿る。演者は観客から見て、あたかも自然と一体になったかのように感じられる。ここまでの動きを習得するためには、十年そこらの練習では足りないらしい。最低でも二十年から三十年はかかるようだ。しかし、およそ六百年前から脈々と受け継がれてきた技術を、三十分の一ほどの年月で習得出来るというのは考えようによっては素晴らしいことではないだろうか。無論、だからといってやれと言われて簡単に出来るものではないが。

さて、ここからは着付けと楽器の話に移りたい。能の舞台で着る服は「能装束」とよばれ、一見すると着物のようなだが仕組みは我々が普段着る服とそこまで変わらないらしい。役自体は襟の色

によって区別され、女性の場合襟の色が赤いことが多いようだ。ところで、最近のテレビでは着物を一人で着付けられる「着付け教室」が話題だが、能装束も一人で着るのかというと、実はそうではない。一人の演者の着付けに、なんと三人がかりである。しかもこれでも最低限の人数だというから驚きだ。そして、着付けを手伝う人は演者に必ず「おしまりはどうですか？」や「おあたりは？」などと尋ねながら着付けをする。これは紐の締めまり具合を確かめるうえで重要な言葉なのだそう。

楽器の話に移ろう。今回は特別に大鼓と小鼓を体験させて頂いた。どちらも馬の皮と桜の樹をくりぬいた胴で出来ている。掛け声にあわせて打つものだそう。手首のスナップを利かせるのがコツで、上手くいかないとろくな音が出ない。鼓という単純な構造なのに、演奏するのは非常に難しいものだと感じた。

能に関するいろいろと述べてきたが、興味を持った方はぜひ一度鑑賞してみてほしい。特に大学の課題やアルバイト、その他諸々に追われて弁慶の立ち往生になっている人には、良い息抜きになるかもしれない。

「今もなお愛される理由」

一回生 東 中 舞 華
一回生 横 石 裕 佳

能、狂言は室町時代から六百年続いている日本の伝統芸能である。そして新人生歓迎行事で、能楽を鑑賞する機会をいただいた。

当時、奈良で観阿弥・世阿弥が非常に人気で、噂が京の都にまで流れるほどだったそう。武士は能を鑑賞することなく、「猿楽」だと見下していたが、噂が三代將軍足利義満の耳に入ると、彼はたいそう気に入り惚れ込んだと言われている。こうして歴史にも評価の高い能は、動きを削り少ない動きによって強さを表し、自然と一体化しようという考えを持っている。一方、外国の舞踊には、バレエにみられるように、重力（能における自然）に逆らう動きが多く、能とは真反対だと考えられている。よって外国では、伝統芸能であるにも関わらず、古いとは思われないのである。このように、歴史的で格式高く、敷居が少し高く感じてしまいがちな能に比べて、狂言は「面白ければ笑おう」という考えを持つ、喜劇・コメディであると言われる。これらを踏まえ、伝統文化を学ぶということは、何百年もの時間を一度に知れるということだと、お話をしてくださった河村さんはおっしゃった。

私たちは今回、着付・狂言・仕舞の見学と小鼓・大鼓体験をした。そしてひとつひとつにこだわりを感じた。人物によって、お面はもちろん、着物の色や襟の重ね方、髪型やかづらの材料まで異なることに驚いた。また、便利な世の中にも関わらず、着物の固定は針と糸を使う昔の方法を今もそのまま使っている。このような細かいこだわりが、私たちの視線を奪い、魅了する一つの理由であると思った。特に狂言は若い私たちにとって理解しやすく、親しみやすいと感じた。笑い方ひとつにも様々な笑い方があり、笑い方を観て聞くだけでつられて笑っている人が多くいた。私たちもお腹が痛くなるくらい笑い、とても楽しく、笑顔で溢れていた時間として記憶に残っている。能では、大人の男性を子方が演じていた。開演前に会った時は無邪気に遊んでいて可愛らしかったが、舞台上の彼の演技はそれさえ忘れさせるほど迫力のある演技だった。彼のように受け継いでいくサイクルがあることで、次の世代にも残されていく素晴らしい伝統芸能が残されているのだと感じた。

こうした六百年の歴史の結晶とも言える能楽には、日本特有の繊細さ、美しさ、面白さが詰まっている。そして今もなお進化し続けているからこそ今の時代でも愛され、これからも愛されていくのだろうと感じた。

公開講座（六月七日）

公開講座に参加して

四回生 栗原陽子

今回の公開講座では「軍記史の終章」という題目で笹川祥生先生、「三巻本『枕草子』不審本文考―『風は』の段「夏とほしたる綿衣」を中心に―」という題目で後藤康文先生にご講演していただきました。私は坂本信道先生のゼミに所属していますので、今回は後藤康文先生のご講演についての感想を述べさせていただきます。

講座は『枕草子』『風は』の段で、「夏とほしたる綿衣」の部分と「生絹の単衣重ねて」の部分についてのお話でした。「綿衣」とは『日本国語大辞典』で引くと①綿（わた）を入れて仕立てた服。わたいれ。②綿織物で仕立てた衣服。木綿（もめん）の着物。とありました。配布資料では「生絹の単衣重ねて」の場面では「単衣を綿衣の上に重ねて着るはずがない」とありました。確かに『平安朝服飾百科事典』によると「綿衣」は「綿入りの衣」であることから、この後に続く「この生絹だにいと所せく暑かほしく、取り捨てまほしかりに」の文も含めて考えると夏の間生絹の上に綿衣を重ねて寝る解釈は厳しいと感じました。しかし「綿

衣」が一年中干す手入れ方法であった場合、私が「暑くなっても寒い時があるかもしれない」。

と夏用ふとんに変えることができていないように夏が過ぎそうな頃、肌寒く感じ綿衣を重ねている姿も想像できると思いました。

そして後藤先生の言葉で印象に残っているものが二つあります。一つ目は

「自分のアイデアは出した時点で人のアイデア」です。自分の思いついたアイデアであっても思いついた時点で他人のアイデアを批判するかのように客観視することが大切という意味です。二つ目は

「人を信じて、人のやったことを疑う」

という言葉です。例えば友人を人としては信用するけれど、その友人が書いた論文は疑って読むということです。この心構えは論文を読む時だけでなく様々な場面で思い出したいと思いました。人が発言したこと、行ったことを鵜呑みにするのではなく自分自身で真実を取りに行くことができる人になりたいと思いました。今回学んだ研究に向き合う心構えをまずは目の前の就職活動と卒論、そして京都女子大学を卒業して社会人となっても意識し、常に疑問を解決できる人でありたいです。

二〇一七年度 論文題目

修士論文

慶滋保胤「為二品長公主冊九日願文」論

—平安朝中期追善願文の中における位置づけ—

小西 洋子

平安時代応製詩における〈恩〉の表現について

水上奈津子

萬葉集一〇五、一〇六番歌考

—「曉露」「秋山」を中心に—

利村 芽

大伴家持「越中秀吟」—帰雁を中心に—

平口みさき

『万葉集』における瀉の歌—「鶴」との関係性—

平屋 典子

額田王考—三山歌を中心に—

藤野 佑

柿本人麻呂の「天下」について

松尾 弥幸

—「天下」と「食国」の違い—

枕詞「あをによし」

吉原 裕美

—『万葉集』の「あをによし」と「なら」—

笠女郎の枕詞

吉村 有加

—「みなせがは」「玉くしげ」「剣大刀」を中心に—

卒業論文

上 代

高市皇子による十市皇女挽歌

大口 溪

—「寝ねぬ夜ぞ多き」を中心に—

万葉集における四首構成の歌群について

小川 明莉

—人麻呂と他の歌人との比較—

『万葉集』一七六一・六二番歌についての考察

阪本 葵

—「鹿」の用例を中心に—

相聞歌における「秋の風」と「秋風」

曾我 智子

中 古

『落窪物語』にみえる当時の理想

岩本ありさ

—婚姻形態を中心に—

文学的側面から見る鬼認識

河野紗也加

『とりかへばや物語』における服飾記載

関谷 真代

—男君・女君の服色を中心に—

中古文学における「狸」の存在

富田 琴美

—怪異としての存在を中心に—

女性社会に見える藤原行成の姿

——『枕草子』四十七段と『紫式部日記』を中心に——

『篁物語』における稲荷詣で

——出会いを目的とする寺社参詣——

双子の栄華 ——『木幡の時雨』の構想と趣向——

二条院讃岐と和泉式部

——『二条院讃岐集』に見える和泉式部の影響——

中 世

『松浦宮物語』における高樓

——作者はなぜ秘曲伝授の場に高樓を選択したか——

狂言における山伏の姿とその理由

人と狐の間に見られる関係

『今昔物語集』巻三十における構成

『今昔物語集』における稲荷信仰の影響

金山巨石群の利用の目的 ——太陽観測と妙見信仰——

狂言「素袍落」におけるめでたさの表現

現代における妖怪

「かわいい妖怪」の発生をめぐって

狂言における趣と「をかし」の検討

中山 紗恵

——狂言『花盗人』を中心に探る狂言の柔軟性——
中世の地藏信仰についての検討

林 優乃香

——『今昔物語集』第一七巻を中心に——
中世における因幡堂

松村 美咲

矢島 佑果

——狂言と因幡堂縁起の考察を中心に——
紺青について

——『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を中心に——
能における能面が用いられる意義

狂言〈八尾〉における男色要素の効果

内田 晴子

——閻魔王と地藏の関係性——
『玉葉』における夢信仰

飯田 結香

——治承三年から文治二年を中心に——
狂言の「おかしみ」と「悲しみ」

一井 鮎美

——〈釣狐〉をめぐって——
鬼の形象の変遷

宇波 真美

——『往生要集』から『今昔物語集』・『宇治拾遺物語』へ——
狂言の男色描写の特徴と成立論

太田 成美

——能や同時代の文学作品における男色描写の比較研究——
陀羅尼助に対する認識

大場 温子

——薬業史・近世山岳宗教を背景に——

木田 菜月

小泉 千晶

佐野明日香

佐原 京花

蓮 愛美

丸岡 奈史

湯浅 薫

初村千佳子

福岡ひかる

丸岡 奈史

湯浅 薫

丸岡 奈史

湯浅 薫

丸岡 奈史

湯浅 薫

丸岡 奈史

湯浅 薫

丸岡 奈史

近 世

『大経師昔暦』に見る近松の手法

池田みゆき

—「中段に見る暦屋物語」と比較して

『日本永代蔵』の主題

折田風生乃

『好色一代男』における両親の描かれ方について

山中のどか

—西鶴の他の好色物との比較を通して—

『出世景清』における人物造形とその効果

新宮 希

『心中天の網島』と太宰治『おさん』

矢野 裕子

—「女房の懐には鬼が住むか、蛇が住むか」をめぐって—

小澤蘆庵の「ただごと歌」

橘 真由果

俳諧における「かるみ」について

青野 寛代

『心中天の網島』論 —女同士の義理を中心に—

浅倉 千鶴

『薄雪物語』流行のわけ —先行作品を手がかりに—

稲田 知恵

『卯月紅葉』論

猪野 希里

—なされなかつた与兵衛の弁明と水晶の関係について—

『心中天の網島』についての一考察

西宮 穂花

近松心中物の同音異義語、縁語

井上 優希

『青砥稿花紅彩画』における

岩林 奏恵

弁天小僧の女装についての考察

岩林 奏恵

—『三人吉三廓初買』『都鳥廓白浪』と比較して—

『夕霧阿波鳴渡』—近松の描く夕霧像について—

野村 茉由

『義理』論 —『心中天の網島』を中心として—

大石 真由

都々逸と「いき」

大崎 愛衣

『東海道中膝栗毛』論—狂歌の役割—

折田泉生乃

『朧月猫の草紙』—草双紙の自在—

川建満彩恵

『心中天の網島』中之巻における叔母の台詞の効果

新久保七彩

—「茶屋」を中心に—

『阿古屋を中心に—

『古今六義諸説』の例歌を中心に—

『女殺油地獄』における一考察

—与兵衛という人物について—

西鶴が武家の衆道から見出したもの

津熊 薫

—『男色大鑑』を中心に—

『おさんの女性像—

中村明日香

『出世景清』における諺の使用法

森中 孝美

—幸若舞『景清』との比較から—

『心中天の網島』考 —「女は相身互ひ」を中心に—

『薄雪物語』における人物の描写

『卯月紅葉』論

『義理』論 —『心中天の網島』を中心として—

『東海道中膝栗毛』論—狂歌の役割—

『日本永代蔵』の主題

『朧月猫の草紙』—草双紙の自在—

『心中天の網島』中之巻における叔母の台詞の効果

—「茶屋」を中心に—

『阿古屋を中心に—

『古今六義諸説』の例歌を中心に—

近代

宇野千代「雨の音」論

——作者の意図する「雨」について——

吉本 早織

泉鏡花「夜叉ヶ池」論

——「沈鐘」翻訳の影響について——

壽谷真奈美

「銀河鉄道の夜」論 ——「ほんたうの幸」について——
有島武郎「或る女」について

麻生 滯
池本 幸世

坂口安吾「桜の森の満開の下」論
——「桜」の表現に込められた意味——

竹内香南子

——有島が描く葉子像——

稲垣あやか

川端康成「みづうみ」論
——幼少期からたどる銀平の行動原理——

中尾 早岐

鈴木三重吉「千鳥」論

——「小僧の夢」との比較から見る表現の意匠——

稲本 結佳

伊藤計劃「虐殺器官」考察
——母の視線と〈物語〉——

兵毛真菜美

「グスコープドロリの伝記」について

——ブドリという人物——

井本 杏奈

田山花袋「重右衛門の最後」について
——「語り手」の客観性——

平井 渚紗

「痴人の愛」論 ——服装表現から読む——

桶井 静香

新美南吉「尻の春吉について」——他作品と比較して——

福谷 有香

久生十蘭「春雪」論

——登場人物に反映された十蘭の想い——

工藤 早姫

「Kの昇天」——或はKの溺死——論
——作品構造とドッベルゲンゲルについて——

藤井菜保子

中原中也「北の海」論 ——その風景に表れた心情——

小林 結衣

泉鏡花「夜叉ヶ池」論

——人形と子守唄から見る百合の執着心について——

坂見 遥菜

山田風太郎「さようなら」論

古頭紗代子

——結末と冒頭文について——

島本 侑季

——時代設定から見る小説的しくみと風太郎の戦争観——

松宇美乃莉

江戸川乱歩「孤島の鬼」論

——蓑浦のキャラクター造形と形式による効果——

泉鏡花「龍潭譚」論

宮地 祐子

芥川龍之介「袈裟と盛遠」論

森 由佳

— 眼の役割と「憐む可き女主人公」について —

梶井基次郎「冬の蠅」論 — 海の役割を中心に —
太宰治「狂言の神」における死生観について

廣中 智美
藤田 彩佳

谷崎潤一郎「春琴抄」の書き方

森光 里奈

— 裏切りへの罪意識と自殺 —
獅子文六「てんやわんや」論

松下 陽子

宮沢賢治「黄いろのトマト」論 — ガラスによる効果 —

山近 未来

— 雲の上の花 — に見るお伽ばなし性 —

三木 ころ

尾崎翠「琉璃玉の耳輪」論 — 変装と性の超越 —

熊倉優佳子

尾崎翠「香りから呼ぶ幻覚」論

柳井映里奈

太宰治「千代女」における和子の人物像

大谷 叶

葉山嘉樹「淫売婦」 — 淫売婦の役割について

米田 美波

尾崎翠「無風帯から」論

神崎 愛

宮沢賢治「マリヴロンと少女」の結末について

渡木 智美

— 表題の持つ意味と内容との関連性について —

笹川真悠子

— タゴール思想の影響から —

藤永沙也加

中原中也「盲目の秋」 — 詩の表現について —

長岡実柚羽

太宰治「おしやれ童子」におけるおしやれについて

大植祐美子

梶井基次郎「Kの昇天 — 或はKの溺死」論

長坂 美佳

小野篁の詩文と仏教との関係について

小林 真歩

— 「あなた」という存在を中心に —

漢 文

吉田松陰の「至誠」と「大和魂」

高瀬 祥江

太宰治「きりぎりす」論

野付 吏菜

— 『留魂録』をめぐる —

寺澤 貴恵

— 「私」の語りから見る「私」の宣言と人物像 —

瀧中 優果

『和漢朗詠集』四一五番

小林 真歩

澁澤龍彦「エピクロス肋骨」における

少女の存在について

— 「遊糸」との関係を中心に —

高瀬 祥江

江戸川乱歩「押絵と旅する男」論

東 千紗子

— 「霞晴れ」歌における「いとゆふ」考

高瀬 祥江

— レンズの魔術と効果 —

林原奈津美

— 「遊糸」との関係を中心に —

寺澤 貴恵

梶井基次郎「ある心の風景」からみる心情展開

東 千紗子

簡野道明編『高等女子漢文讀本』の特徴について

寺澤 貴恵

梶井基次郎「桜の樹の下には」論

唐詩における「夢魂」 — 中唐の詩を中心に —

— 成立と消えた憂鬱 —

寺澤 貴恵

— 成立と消えた憂鬱 —

寺澤 貴恵

— 成立と消えた憂鬱 —

寺澤 貴恵

菅原道真「赤虹篇」について

山本 路子

名詞の動詞化について

坂野 茜子

広瀬淡窓の漢詩について 紀行の詩を中心に

吉川 万結

—京都女子大学生へのアンケート調査をもとに—
フィクションの中の女性語

下河原奈穂

国 語 学

外来語の認識について

奥野 穂華

一人称代名詞「うち」について

杉本 春菜

—京都女子大学の学生のアンケートを基に考察する—

新しい意味を確立した語

速渡まりあ

—一人称代名詞の使用状況と意識調査—
オノマトペの変遷 —食エッセイを中心に—

長谷川千桂

方言とSNS

伊藤 優季

流行歌におけるカタカナ語・外国語表現の推移

原根 菜乃

—京都女子大学生へのアンケートをもとに—

京言葉における待遇表現 —『古都』を題材に—

浴永 真帆

江戸川乱歩の文章の特徴

平田 恵莉

児童文学におけるオノマトペ

江藤 芽衣

現代の二人称について

細川 真妃

遠州地域の方言について

大石まこ美

—京都女子大学生へのアンケートをもとに—
若者言葉に対する意識の変化について

三浦 彩

—中学生へのアンケートをもとに—

大阪府の方言について

河内悠貴子

—京都女子大学生へのアンケート結果をもとに—
漫画『らんま1/2』におけるオノマトペ

吉川 晶

—高校生へのアンケートをもとに—

外来語について

小竹未希子

色彩「白」を通してみる、源氏物語

上野 真紀

岡山県の方言について

小原 知恵

—服色の「白」を中心に—

上野 真紀

—高校生へのアンケートをもとに—

女性ことばに対する知識と実用の差異について

齊木満里菜

ホオジロの聞きなし —「二筆啓上仕候」を中心に—

浦谷 南帆

—女性向けマナー本と京都女子大学生へのアンケートをもとに—

齊木満里菜

小学校教育におけることわざ、慣用語の実態

大野 夢子

「お／＼される」形式が尊敬語として

使用されている理由

『倭玉篇』における〈男部〉について

— 諸本分類の検討を中心に —

『広辞苑』改訂に見る現代の語彙の変化

— 第五版と第六版の間で消えた言葉から —

『仮名読新聞』における「御」と「五」の使い分け

オノマトペ・標識と接尾語「こ」の関連について

時代背景と他国との比較から見る

ことわざの意味の変化

— 「犬も歩けば棒に当たる」を中心に —

大阪方言副詞について

— 「なんしか」「なんし」「なんしよ」「なんせ」 —

「女ことば」・「おネエことば」の語彙

— 感動詞「あら」終助詞「わ」を中心に —

台詞から読み解く『もののけ姫』

— 〈役割語〉を中心に —

「かわいい」の語誌

近代文学における尊敬の助動詞

— 文学作品での「ナハル」「ナル」の使用状況 —

現代方言「こ無礼しました」

— 用法の細分による共通語との区別 —

タカラジエンヌの芸名における流行と変遷について

米原 梨沙

矢野 祥子

奥田 紗良

久保 楓夏

塩見 奈穂

白石 直子

徳永 由理

外村 姫香

前田 実郷

松浦万里奈

水谷 文香

村上 春陽

森野あゆみ

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

集事務局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。
本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。
本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

小山順子・滝川幸司・峯村至津子・山崎ゆみ

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、五点が掲載となりました。

また、後藤康文先生に公開講座での御講演内容を御寄稿賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(小山・山崎)